

建築物の言語描写における<日本らしさ>の多態性
Polymorph of "Japanese-style" in text description of buildings

5. 建築計画-3. 計画基礎

日本らしさ 多態性 言語描写
構成要素 操作手法 建築空間

準会員 ○上間 鉄平*

UEMA Teppei

正会員 北川 啓介**

KITAGAWA Keisuke

正会員 大井 亮***

OI Ryo

1. はじめに

現代の設計者は、日本らしさを建築空間の中に具現化する際、まず日本的な事物や現象とその特徴に着目し、それらを根底におきながら、建築物の部位や材料といった構成要素に対して、変形や配置などの操作を行うことで、日本的な建築空間を創出している。そういった設計のされ方によって、日本らしさが具現化された建築空間の様態に表れる意味に多様性が生じる。日本らしさの多態性を見出すことができる。本研究では、建築物の設計過程の関係から、現代の建築空間における日本らしさの多態性を明らかにすることを目的とする。

2. 定義

設計者が日本らしさを建築空間の中に具現化する際に着目した日本的な事物や現象を日本的事象とする。その前提として、事物や現象を日本的だと述べる根拠となる箇所を日本的言及とする。また、日本的事象がもつ特徴を性質、建築物を構成する部位や材料を構成要素、構成要素に対して行われる操作を操作手法と定義する。

3. 研究対象

設計者の言説として十分な資料を得ることができ、継続的に建築作品及びその解説文を掲載している建築専門誌である『新建築』¹⁾を研究資料とする。1980年から2011年までを対象期間とし、作品の解説文の中で、着目した日本的事象について言及し、それを反映した建築空間について記述された箇所、591事例を研究対象とする。

4. 研究方法

研究対象とした記述から、日本的言及をもとに、日本的事象、性質、構成要素、操作手法を抽出し(図1)、それぞれ分類する(表1~4)。次に、日本的事象と性質の組合せを分析、考察し、<日本らしさ>の特性を導出する。さらに、導出した<日本らしさ>の特性と操作手法の組合せを構成要素ごとに分析し、建築空間における<日本らしさ>の多態性を考察する。

『新建築』2010年1月号 pp.179 「追手門学院大学1号館」三菱地所設計		
日本人の心に残る代表的な花として桜がある。サクラが満開に咲くオフィスをつくろうと考えた。追手門学院の花もサクラであった。サクラはキャンパス中にある。ただし春の短い期間しか咲かない。…サクラの模様を用いたキャストシステムを構築した。		
	抽出テキスト	分類
日本的言及	日本人の心に残る代表的な花	
日本的事象	桜	【自然物】
性質	日本人の心に残る代表的な花	【象徴】
	春の短い期間しか咲かない	【変容】
構成要素	キャストシステム	〈材料〉
操作手法	サクラの模様を用いた	〔立体形状〕

図1 テキストの抽出と分類

表1 日本的事象の分類

分類	〔自然物〕	〔光陰〕	〔風景〕	〔場所〕	〔都市〕	〔建築物〕	〔空間〕	〔建築部位〕	〔庭園〕	〔調度品〕	〔技術〕	〔文化〕	〔芸術〕	〔宗教〕	〔慣習〕	〔人〕	〔美意識〕	〔時代〕
箇条	11	7	9	33	12	165	77	52	48	26	10	44	8	11	9	28	35	6

表2 性質の分類

分類	記述例	箇条	分類	記述例	箇条	分類	記述例	箇条
〔優美〕	美しい	15	〔変容〕	変わりゆく	5	〔気候〕	温帯	21
〔曖昧〕	曖昧な	25	〔融和〕	調和する	32	〔配置〕	配置する	10
〔繊細〕	繊細な	22	〔秩序〕	秩序	10	〔構成〕	構成	24
〔簡素〕	単純な	9	〔無秩序〕	ランダム	7	〔構築〕	面の集合	12
〔透明〕	透けて	18	〔非対称〕	非対称	26	〔内内関係〕	土間と居間の関係	1
〔合理〕	合理的	6	〔対比〕	対比	6	〔内外関係〕	内と外の関係	35
〔柔和〕	柔らかな	12	〔象徴〕	象徴的な	7	〔水平〕	水平性	5
〔親和〕	おおらかな	6	〔律動〕	リズム感	4	〔交流〕	交流	7
〔快適〕	快適な	6	〔幾何学〕	幾何学の	2	〔体積〕	シークエンス	25
〔開放〕	開放的な	16	〔外形〕	カタチ	21	〔機能〕	機能美	9
〔柔軟〕	対応できる	10	〔色〕	青	23	〔保護〕	保護する	1
〔荘厳〕	静肅	6	〔光〕	光	21	〔なし〕		11
〔分節〕	分節した	8	〔陰影〕	影	5			
〔連続〕	連続した	7	〔自然〕	自然の	95			

*〔なし〕は性質に関する記述がないことを示す。

表3 構成要素の分類

分類	記述例	箇条	分類	記述例	箇条	分類	記述例	箇条
〈建築全体〉	建築物	102	〈架構〉	梁/斗	21	〈開口〉	開口	36
〈室〉	部屋	47	〈柱〉	柱	24	〈開口付部材〉	ルーバー	21
〈外構〉	庭/池	48	〈屋根〉	屋根	62	〈建具〉	戸	27
〈通路〉	廊下	39	〈壁〉	壁	89	〈材料〉	アルミ	58
			〈床〉	床	17			

表4 操作手法の分類

分類	形態的			装飾的			構成的										
	平面形状	立体形状	色彩	素材	表面加工	垂直配置	水平配置	構造	配列	重層	包囲	分化	接合	可動	緑化	設置	廃止
箇条	38	145	34	33	33	26	75	14	27	12	21	6	7	13	21	81	5

* 名古屋工業大学工学部 学部生

** 名古屋工業大学大学院つくり領域 准教授・博士(工学)

*** 名古屋工業大学大学院工学研究科 博士前期課程・学士(工学)

Undergraduate Student, Faculty of Engineering,
Nagoya Institute of Technology.

Associate Professor, Tsukuri College, Graduate School of Engineering,
Nagoya Institute of Technology, Doctor of Engineering.

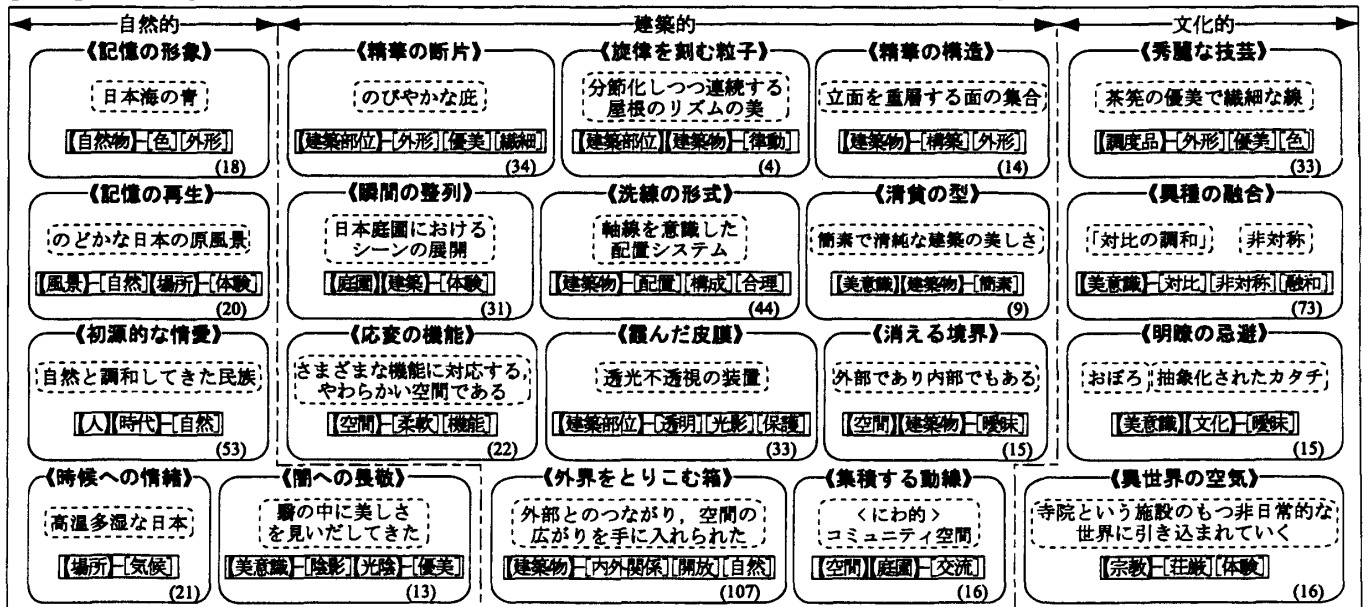
Master Course Student, Graduate School of Engineering,
Nagoya Institute of Technology, Bachelor of Engineering.

5. 日本的象と性質からみる<日本らしさ>の特性

設計者が着目した日本的象と性質を組み合わせ、それぞれの組合せ数と意味内容をもとに考察した結果、20種の<日本らしさ>の特性を導出した(図2)。

《記憶の形象》は、【自然物】と【外形】、【色】、【象徴】や、【場所】と【色】などの組合せがみられ、日本に存在する場所や自然物の特徴を、日本の象徴として設計者の記憶に保管している様子を表している。《記憶の再生》は、【場所】と【体験】や、【風景】と【自然】、【柔和】などの組合せがみられ、設計者の記憶の中に存在する日本という場所における光景のイメージや印象を表している。《初源的な情愛》は、【時代】と【自然】や、【人】と【自然】などの組合せがみられ、日本人が古くから自然と共に生活してきたことで、自然に対しての情愛を潜在的にもつ様子を表している。《閑への畏敬》は、【光陰】と【優美】、【変容】や、【美意識】と【陰影】などの組合せがみられ、光の届かない世界や、時間帯で形を変化させる影に対する敬いの念を表している。《精華の断片》は、【建築部位】と【外形】、【優美】、【繊細】などの組合せがみられ、優れた意匠をもつ日本の建築物を局所的に捉え、その形態の優麗さを表している。《精華の構造》は、【建築物】と【構築】などの組合せがみられ、優れた意匠をもつ日本の建築物の構築のされ方や、その内部構造の秀逸さを表している。《洗練の形式》は、【建築物】と【配置】、【構成】、【合理】などの組合せがみられ、日本の建築物が、長い年月を経て形成されてきたことから、洗練された合理性の高い様式をもつことを表している。《応変の機能》は、【空間】と【柔軟】、【機能】、【分節】などの組合せがみられ、

日本の建築空間が様々な状況に対応できることから、機能性の高い空間であることを表している。《霞んだ皮膜》は、【建築部位】と【内外関係】、【透明】、【光】、【保護】などの組合せがみられ、建築物の周りにまとった部位により、光や視線を調整し、内外を柔らかく仕切る様子を表している。《消える境界》は、【建築物】と【曖昧】や、【空間】と【曖昧】などの組合せがみられ、日本の建築物において、空間同士の境界が不明瞭になっていることによる水平の連続性を表している。《外界をとりこむ箱》は、【建築物】と【内外関係】、【快適】、【自然】や、【空間】と【開放】、【内外関係】などの組合せがみられ、日本の建築物や空間が外部に存在する自然を内部にとりこむことにより、自然を享受することができる生活の様子を表している。《集積する動線》は、【空間】と【交流】や、【庭園】と【交流】などの組合せがみられ、日本の生活の中においての庭や路地などの空間が、公共性の高い、人々の交流の場となっていた様子を表している。《異種の融合》は、【美意識】と【融和】、【対比】、【非対称】、【無秩序】などの組合せがみられ、色や形などの点で全く異なるものを混在させることによる、無秩序さの中に存在する秩序が、日本人に安定感や安心感を与えている様子を表している。《明瞭の忌避》は、【文化】と【曖昧】や、【美意識】と【曖昧】などの組合せがみられ、表現を曖昧にすることにこだわり、直截的な表現を極力避けようとする日本人特有の性格を表している。《異世界の空気》は、【宗教】と【荘厳】、【体験】などの組合せがみられ、日常生活とは乖離した世界である、日本の神仏を奉る場が放つ精神や雰囲気を表している。



※ 図中《 》は<日本らしさ>の特性、□内は【日本的象】-【性質】の組合せ例、()内は性質の記述例、()は事例数を示す。

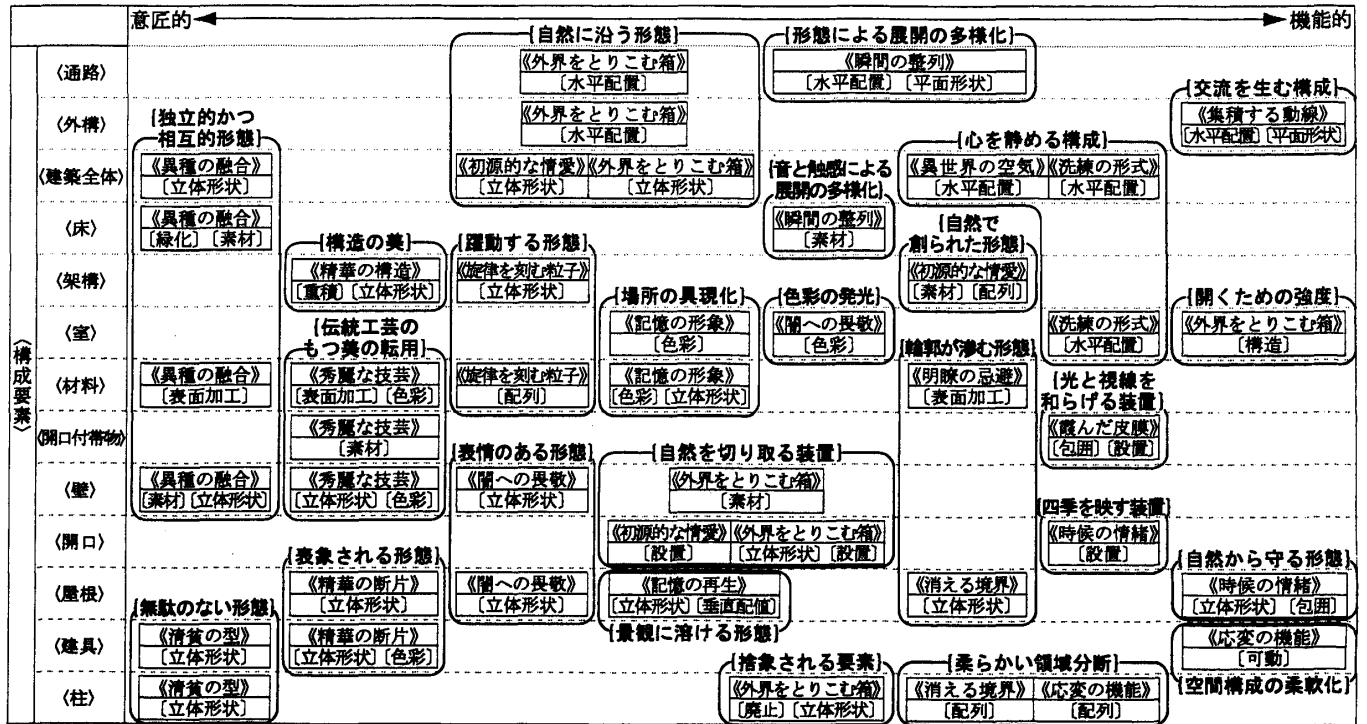
図2 日本の象と性質から導出した<日本らしさ>の特性図

6. 建築空間における〈日本らしさ〉の多態性

日本らしさは、計画された構成要素を通して建築空間に表れる。そこで、構成要素ごとに〈日本らしさ〉の特性と操作手法を組み合わせ、それぞれの組合せ数と意味内容をもとに、建築空間における〈日本らしさ〉の多態性を考察した結果、25種の類型を得た(図3)。

{独立かつ相互的形態}は、〈建築全体〉、〈材料〉、〈床〉、〈壁〉にみられた。中でも、〈建築全体〉では、《異種の融合》と〔立体形状〕などとの組合せがあり、建築自体を特異な形態にすることで個性を確立し、異なる個性を組み合わせることで安定感をもたらす。結果、個が互いに干渉し合い調和する建築空間を創出する。{無駄のない形態}は、〈建具〉、〈柱〉にみられた。中でも、〈建具〉では、《清貧の型》と〔立体形状〕などとの組合せがあり、建具の形状を簡素にすることによって、無駄を削ぎ落とした繊細な意匠をもたらす。結果、しおらしくたおらかな建築空間を創出する。{構造の美}は、〈架構〉のみにみられ、《精華の構造》と〔重積〕、〔立体形状〕などとの組合せがあり、架構を重ね構築することにより、組み合った材の均衡した姿が美しさをもたらす。結果、均衡の美しい力強い建築空間を創出する。{伝統工芸のもつ美の転用}は、〈材料〉、〈壁〉、〈開口付帯物〉にみられた。中でも、〈壁〉では、《秀麗な技芸》と〔色彩〕、〔立体形状〕などとの組合せがあり、伝統的な工芸品の特徴を引き継いだ壁の形態が、繊細な美しさをもたらす。結果、工芸品の面影を感じる上品な建築空間を創出する。{表象される形態}は、〈屋根〉、〈建具〉にみられた。中でも、〈屋根〉では、《精華の断片》と〔立体形状〕などとの組合せがあり、屋根を日本建築の特徴を引き継いだ形状にすることで、親しみ深い、あるいは威厳のある雰囲気をもたらす。結果、日本を象徴する建築空間を創出する。{躍動する形態}は、〈架構〉、〈材料〉にみられた。中でも、〈材料〉では、《旋律を刻む粒子》と〔配列〕などとの組合せがあり、材料の配列の仕方により生まれる立体的な表面が、躍動的な印象を与える。結果、人の心を高揚させる建築空間を創出する。{表情のある形態}は、〈壁〉、〈屋根〉にみられた。中でも、〈壁〉では、《闇への畏敬》と〔立体形状〕、〔平面形状〕などとの組合せがあり、壁の形状を自由に変化させることで生まれる陰影により、幻想的な印象を与える。結果、光の変容により移ろいゆく影の美しさを表す建築空間を創出する。{自然に沿う形態}は、〈通路〉、〈外構〉、〈建築全体〉にみられた。中でも、〈建築全体〉では、《初源的な情愛》と〔垂直配置〕などとの組合せがあり、建築物自体のボリュームを軽減し、周辺環境に寄り添うような形態にすることにより、自然と生活を

近づける。結果、人と自然との親近性を表す建築空間を創出する。{場所の具現化}は、〈室〉、〈材料〉にみられた。中でも、〈材料〉では、《記憶の形象》と〔立体形状〕、〔色彩〕などとの組合せがあり、日本という場所の特徴を、材料の色彩や形状を用いて具現化することで、利用者に記憶の想起をもたらす。結果、郷愁を覚える建築空間を創出する。{自然を切り取る装置}は、〈開口〉、〈壁〉にみられた。その中でも、〈開口〉では、《外界をとりこむ箱》と〔設置〕、〔立体形状〕や、《初源的な情愛》と〔設置〕などとの組合せがあり、大きな開口の設置により、外部の自然を縁で切り取り、風景をインテリアとして内部にとりこむことができる。結果、自然との共生を実現した建築空間を創出する。{景観に溶ける形態}は、〈屋根〉のみにみられ、《記憶の再生》と〔立体形状〕、〔垂直配置〕などとの組合せがあり、周辺の日本的な景観に配慮し、屋根のボリューム感やデザインの調整をすることで、周りの景観との調和をもたらす。結果、日本の景観に溶け込んだ建築空間を創出する。{形態による展開の多様化}は、〈通路〉のみにみられ、《瞬間の整列》と〔平面形状〕、〔水平配置〕などとの組合せがあり、緻密な経路配置や平面計画によって、空間の展開に多様さをもたらす。結果、日常に変化という彩りを与える建築空間を創出する。{音と触感による展開の多様化}は、〈床〉のみにみられ、《瞬間の整列》と〔素材〕などとの組合せがあり、床に多様な種類の素材を用い、多彩な音や感触の変化をもたらす。結果、聴覚と触覚に対する多彩な変化を楽しめる建築空間を創出する。{色彩の発光}は、〈室〉のみにみられ、《闇への畏敬》と〔色彩〕などとの組合せがあり、照明を暗くすることで、輝くような色彩と陰のコントラストが空間に流麗さをもたらす。結果、闇の中の美しさを表す建築空間を創出する。{捨象される要素}は、〈柱〉のみにみられ、《外部をとりこむ箱》と〔廃止〕などの組合せがあり、内外の境にある柱をなくすことで、連続性をもたらす。柱の不在が内外一体となる建築空間を創出する。{心を静める構成}は、〈建築全体〉、〈室〉にみられた。中でも、〈建築全体〉では、《異世界の空気》と〔水平配置〕などとの組合せがあり、建築物を緻密に配置することで、回遊する人々の精神に安穩をもたらす。結果、心の静寂を表す建築空間を創出する。{自然で創られた形態}は、〈架構〉のみにみられ、《初源的な情愛》と〔素材〕、〔配列〕などとの組合せがあり、自然界の素材を用いた架構で覆い囲むことにより、あたかも森の中にいるような感覚を与える。結果、自然を体感させる建築空間を創出する。{輪郭が滲む形態}は、〈材料〉、〈屋根〉にみられた。中でも、〈材料〉では、《明瞭の忌避》と



※ 図中の、 内は「<日本らしさ>の特性」上段と、「操作手法」下段の組合せ例を示す。

図3 構成要素ごとの「日本らしさ」の特性と操作手法の組合せからみる「日本らしさ」の多態性

[表面加工] などとの組合せがあり、材料の表面を加工することで、滲んでぼやけた印象を与える。結果、不思議な建築空間を創出する。{柔らかな領域分断} は、(柱) のみにみられ、《応変の機能》と [配列] や、《消える境界》と [配列] などとの組合せがあり、柱を規則的に並べることで感覚的に領域を分ける。結果、機能性と曖昧が融合した建築空間を創出する。{光と視線を和らげる装置} は、(開口付帯物) のみにみられ、《霞んだ皮膜》と [包囲]、[設置] などの組合せがあり、開口付帯物を設置することで、内外を仕切りつつ、光や風をゆるやかに内部空間へととりこむ。結果、明るく快適な建築空間を創出する。{四季を映す装置} は、(開口) のみにみられ、《時候の情緒》と [設置] などとの組合せがあり、開口を設置することで、四季の移り変わりの様子を室内に映し出す。結果、移り変わっていく四季の美しさを感じる風情ある建築空間を創出する。{交流を生む構成} は、(外構) のみにみられ、《集積する動線》と [平面形状]、[水平配置] などとの組合せがあり、場所に適した配置計画により、人同士の交流を誘発させるように人々の興味を特定の場所に引きつける。結果、人との縁を大切にする日本文化を表す建築空間を創出する。{開くための強度} は、(室) のみにみられ、《外界をとりこむ箱》と [構造] などとの組合せがあり、室自体を強度のある構造にし、視界の妨げのない、外部への開放をもたらす。結果、自然を多くとりこめる建築空間を創出する。{自然から守る形態} は、

(屋根) のみにみられ、《時候への情緒》と [立体形状]、[包囲] などの組合せがあり、大きな屋根が空間を包み込むことにより、気候の変動による内部空間への影響を緩和する。結果、年間を通して安定した生活環境をもつ建築空間を創出する。{空間構成の柔軟化} は、(建具) のみにみられ、《応変の機能》と [可動] などとの組合せがあり、建具を自由に動かすことにより、空間の構成を多様に変化させることができる。結果、あらゆる用途に転用可能な、柔らかな空間を創出する。

7. 結論

建築空間における「日本らしさ」の多態性として、日本らしさを想起させる形象としての側面、日本らしさを感じさせる四季や陰などの存在と人との結びつける媒体としての側面、日本古来からの生活や様式を体感させる仕組みとしての側面を捉えることができた。また、設計者はそれらの側面を、構成要素の操作性の活用、規模の調整、物質性の活用によって表していることがわかった。以上より、設計者は日本らしさを具現化する際、独自性や象徴性の高い形態などにより構成要素の存在感を強調したり、逆に透明化や可動化などにより存在感を抑制するといった、構成要素の存在感を調整することで、建築空間に日本の生活、時間、人の感性を直接的または間接的に介在させていることが明らかとなった。

参考文献

- 1) 『新建築』, 新建築社, 1980.1-2011.12